

中山まち子氏 調査コメントに関する補足資料

学童クラブに通う子どもは過去最高を記録

共働き世帯の増加に伴い、放課後児童クラブ（通称「学童クラブ」）の登録児童数は右肩上がり
で上昇しています。こども家庭庁の「令和5年 放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）
の実施状況」によると、令和5年度の児童クラブの登録児童数は145万7384人と過去最高を記
録しました。

しかし、こども家庭庁の調べでは在籍する児童の約8割が小学1年生から小学3年生で占めて
おり、「小学4年生で児童クラブを卒業する」という子どもが多くなっています。法改正もあり
小学6年生まで通えるものの、現状は高学年になると通う児童も減っています。

今回の調査からも学童を利用する学年に関して「小学3年生までの利用を考えている」という
答えが32.8%と一番多いという結果でした。

小学4年生になると放課後の過ごし方は親にとって大きな課題となります。奇しくも学童卒業
のタイミングは小4の壁と重なり、同調査でも55.7%の親が懸念しています。

「小学4年生になったから放課後は家で過ごして勉強を終わらせてね」の一言で済ませるのは
無理があり「親として難しい問題にどのように対処していくか」が問われます。

親にとって気になる4年生以降の過ごし方問題

小学4年生以上になると、多くの子が放課後を自由に過ごせるようになり、親の目の届かない
場所で遊ぶ機会も増えます。仲良しグループもできて親よりも友達の意見に流され、親との約束
を破ってしまう子もいます。

我が子がルールを守らなくなると、子どもがどこにいて誰と遊んでいるのか把握できないとい
うことも起こります。万が一に何か起きた時、事前に決めておいた「緊急事態が起きた時の対
応」通りに行かないのは避けたいところです。

こうした事態を防ぐためにも、親子でじっくり話し合いを重ねて行くだけでなく、子どもの居
場所や帰宅時間を確認できるIoTを導入するとより安心です。

また、調査結果からも留守番中にスマートフォンやタブレット端末の使用時間が長くなること
を心配する親も少なくありません。こうしたツールを使用する時間が長くなると勉強すべき時
間が失われていきます。

子どもの学習時間確保の意味でも、親の目が行き届かない中でこうしたツールの使い方を家庭
内で決めなければなりません。

自分で勉強する子のメリット

学童に通っている子の中には習い事がある日は、学校からそのまま習い事の教室に直行し、そのまま家に帰宅する子もいます。そのため、小学1年生や2年生の子どものいる家庭でも子どもが留守番をしながら宿題ができるのが理想的です。

自学自習できる子になるには低学年からの学習習慣や勉強に対する明確な目的意識、「やって当たり前」という考えを子どもが持っていることが大切です。そのためにも「テストの目標点」「将来の夢」「進路進学を考える」といった勉強への目的意識を育てていく必要があります。

低学年の頃は学校の宿題の確認、家庭学習で使用しているドリルや教材の丸つけを親が担当し「解いて丸つけをして見直しをする」という流れの中で親が関与することで「勉強はこういう風に進めていく」と、子どもが自然と理解することができます。

小学2年生から3年生になると苦手教科や苦手単元が出てくるため、親が家庭学習に普段から関わっていない小4の壁で躓きやすくなります。

こうした問題を防ぐには親子の会話が大切です。子どもと話をすることで「どの単元が分からないのか」が分かり、教材を用意することができます。

しかし、子どもが宿題を後回しにし、スマートフォンやタブレット端末を使用していることが知られれば、帰宅後の親子の会話も「どうしてやっていないの!」と叱ることだけで終わってしまいます。

どうやって自学自習できる子になるか

多くの親が悩む自分から勉強する子になるには「学習の固定化」が欠かせません。

毎日決まった時間を「勉強時間」に設定すると、日常生活の一つに組み込まれ、習慣化しやすくなります。次第に「勉強するのは当たり前」と思うようになり、学童を卒業する頃には親が口出しをする回数も減る中で自分のペースで勉強に取り組めるようになります。

親が仕事で不在でも子どもの帰宅時間や留守番中の過ごし方を把握していると「この時間に勉強しよう」と親子で納得できるスケジュールを作ることができます。

子どもの家庭学習を定着させるには、以下のことに気をつけて、実践していくとスムーズに習慣化しやすくなります。

- ・子どもの学力に合わせた教材を揃える
- ・家庭学習の時間は10分、15分と短時間からスタートする
- ・取り組む科目数を増やすことや教材のレベルを上げて学習時間を増やす

一気に完成させるのではなく、自然と勉強時間を増やしていくことが大切です。子どもが意識しないうちに学習量が増えていくと「このくらい勉強するもの」とストレスなく受け入れるようになります。

学童卒業に向けて自立心を育てることの重要性

最初から最後まで親が口出しすると子どもの自立心が育つことは難しくなります。様子を見守り「ここはこうした方が良いのでは」とアドバイスを送ることに徹して「自分でやれる子」への道を誘導していくことを意識しましょう。

そして、放課後に遊びに出かける場合も「遊ぶ場所を固定する」「川など危険な場所には絶対に近寄らない」と普段の会話で言い聞かせて安全に過ごす危機意識を高めることが大切です。

しかし、いくら話を重ねていても何が起きるか分からない怖さもあります。

① 離れていても子どもの放課後の様子を確認できる

共働き世帯が増え、平日の子どもの動きを直接確認することが難しくなっています。

平日の子どもの放課後の動きを確認できる IoT を活用することで子どもは「親に見守られている」を意識しながらやるべきことに取り組み、安全に過ごすことを心がけましょう。親は「ちゃんと家に戻ってきたか」という不安を解消することができます。

もちろん、すぐに自分から何でもできる子にはなりませんが「IoT によるみまもりで自分が帰宅したことを通知してくれる」という安心感から「宿題や勉強を親が帰ってくる前に終わらせる」という意識を持ち、自学自習の定着につながります。

IoT によるみまもりは単に子どもの行動を確認するだけでなく「自分の行動を親は確認できるからちゃんとやろう」と自立心を促す存在にもなります。

② 子どもとの時間を有意義なものにする

帰宅して子どもが宿題もなにもやっていないと親が注意をし、子どもと言い合いになる事態になります。その日はずっと気まずい雰囲気の時が流れてしまうでしょう。貴重な親子の時間をケンカなどで消費するのはもったいないことです。

宿題などをしていないとイライラが募り、子どもの話に耳を傾ける余裕が生まれません。子どもの方も次第に親との会話を疎ましく思うように感じます。

親子の時間をより有意義なものにするには、子どもは宿題を済ませている状態にしておくことが望ましいです。また、親のいない時間帯を「子どもがどのように過ごしているか」を働いている親でも把握できると話の幅が広がりやすくなります。

例えば、IoT によるみまもりでは、帰宅時間がスマートフォンのアプリに通知が届くため「今日はいつもより帰宅時間が早かったね」という声かけができます。

子どもの放課後の様子を親が確認できる、または子どもから「こういう風に過ごした」という話を聞き、たとえ親子が離れている時間であっても「共有した感覚」を持てるようになります。

③ 家族団らんは親子の絆を深める

家族団らんの時間があると「学校でこんなことがあった」「テストがあるけど頑張る」という会話が生まれます。

親子の衝突が少なく、家族のひと時があることは子どもの健全な成長に欠かせません。

低学年の頃は「留守中でも親が見守っている」という安心感で勉強に取り組むようになり、強制ではなく自然と「勉強する子」の階段を上がっていくことができます。

IoT みまもりは、子どもの成長を促すサポーター的な存在となり、親としては子どもの居場所や行動を確認できるお守りの存在になります。共働き世帯が増えている今の子育てにはみまもり機能のある IoT を活用することは現実的な選択の一つです。

小学校の最初の 3 年間で大切

子どもの小学校入学は子育てにおいて親離れの最初の段階に入ることを意味する大きなイベントです。しかし、一人で責任を持って行動することが一気に増えるため親としては「ちゃんとできるか」と心配になることも増えます。

子どもが「自分の事を自分でできる子になる」というのは大きな課題であり、小 4 の壁が来る前の最初の 3 年間で対策を講じておくことが非常に重要で、「小 3 の坂」を上り小 4 の壁を越せるカギになります。

子どもと過ごす時間が限られている共働き世帯では IoT みまもりという最新技術は我が子が「自分の事は自分でできる子」に育てる際の強い味方になります。

参照 こども家庭庁 令和 5 年 [放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の実施状況](#)